「行列の時代」としての近世

- 武士・異国人・祭礼の行列から近世社会を考える（PW1）-

近世（江戸時代）には、参勤交代の行列のほか、朝鮮通信使や琉球国王の使節、オランダ商館長の行列が、それぞれ特徴のある「行装」（服装や道具）を整えた行列（行列を整えることを「行列をたてる」という）で江戸城に向かった。近世を通してもっとも権威のあった将軍の行列については、上洛・参内あるいは行幸の供奉は三代将軍家光以降約 200 年以上も途絶えたが、日光社参や小金原の鹿狩りには、装いを凝らした大勢の供を従えて出かけた。行列が通る道筋や宿場では、人々は、「行列をたてて」やってくる一行をもてなす（「馳走」と呼ぶ）とともに見物した。このような行列に、城下町で行われた祭礼行列などを含めると、近世社会は行列にあふれていたということができる。

近世社会を彩るこのようなさまざまな行列のうち、将軍を頂点とする武士の行列からは、武士集団内部の身分制度を反映した構成を（PW2～9）、朝鮮通信使（PW10～13）・琉球国王の使節（PW14～18）・オランダ商館長の参府行列（江戸へ向かう行列）（PW19～21）からは、近世の外交関係がどのような構造になっていたのかを読み取ることができる。城下町の祭礼行列は、その城下町の住民たちの階層構造だけでなく、仮装行列を通して彼らの武士像、外国人像を反映していた。そして、こうした行列は、いずれも「しばしば絵に描かれた」という共通性をもっている。そこで、この報告では、近世社会を「行列の時代」ととらえ、「描かれた行列」を通してわかる近世社会像について紹介したい※1。

また、城下町の祭礼では、こうした外交使節の行列を、異国情緒あふれた物珍しいものとして仮装行列のテーマにしており、この仮装行列の様子も絵に描かれている。本物の外交使節の行列を描いたものと城下町祭礼における仮装の「異国人」行列を描いたものとを見比べることで、近世の人々がどのような外国認識を有していたのかについて考えることができる。「鎖国をしている」と一般的に考えられている近世に、実はこれだけの外交使節が行列を組んで江戸へ向かい、それを沿道の人々が見物し、すぐにそれを自らのお祭りの仮装行列で表現している。このことから、あらためて近世日本の国際関係や人々の「異国」「異国人」認識（とくに朝鮮や琉球に対する）についても考えることができるのではないか。

なお、この報告は、2012 年 10 月 16 日から 12 月 9 日までの間、私が所属する国立歴史民俗博物館で開催した企画展示「行列にみる近世 - 武士と異国と祭礼と - 」の概要を紹介するものでもある※2。

※1　はじめて、この「描かれた行列」に注目し、江戸時代を「行列の時代」として考えようとしたのは、黒田日出男・ロナルド＝トビ編『行列と見世物』(朝日百科日本の歴史のシリーズである別冊「歴史を読み直す」の第 11 巻、朝日新聞社、1994 年)であり、この報告もこれに大きな影響を受けている。なお、本報告の骨子については、2010 年に国立民族学博物館で開催されたシンポジウム「　　」における報告（久留島「行列にみる近世の『異国人』認識」野林厚編『東アジアの民族イメージ』国立民族学博物館調査報告書 104、2012 年）および国立歴史民俗博物館企画展示「行列にみる近世」(展示図録『行列にみる近世–武士と異国と祭礼と–』国立歴史民俗博物館、2012 年)に基づいている。したがって、叙述も含め相互に重なり合う部分も多いことはあらかじめお断りしておきたい。できれば併せて参照されたい。

※2　以下、参考文献については、展示図録『行列にみる近世–武士と異国と祭礼と–』（国立歴史民俗博物館、2012 年）240–243 頁の「主な参考文献・図録」を参照されたい。なお、本図録の英語訳および韓国語訳については、公開すべく努力中である。図像は「ＰＷ」として「ＰＷ１」のように番号を付した。

１　武士たちの行列　- 武士たちの行列は江戸へ向かう（ＰＷ２２）-

戦うことをその存在理由とし、実際に武力を独占した近世の武士たちは、城下町に集住し、言わば集団を形成することで他の身分の人々を支配した。参勤交代の行列が、最後まで鉄砲・弓・槍を備えた軍事的行列であり続けたことはこのことを象徴する。その一方、200 年以上にわたって実際の戦闘がなくなるなかで、武士たちの社会的役割も、主君の護衛や城門などの警備をする「番方」から、武士たちによる安定的な支配を実現するための行政官僚である「役方」へと比重が移る。こうした武士たちのありようの変化は、彼らの行列にどのような影響を与えたのか。庶民は、こうした変化も含め、それをどのように受けとめたのだろうか。

（１）『徳川盛世録』に盛り込まれたさまざまな行列　–往来するさまざまな権威ある行列–

はじめに紹介する『徳川盛世録』は、元旗本の市岡正一が編集し、１８８９年、江戸三百年祭を記念して発行されたものである(PW23/24)。勝海舟が「再観旧典」という題字を寄せたように、「江戸の繁昌」ぶり（徳川氏が支配し、盛んだったときの世のなか）を回顧するという趣旨のものである。内容は、①政府の典礼・儀式、②諸家の法度・作法などのさまざまな秩序が、家康の江戸入部以降「歳を追って定ま」ったことを叙述するものである。本書は、多くの挿絵を使っており、ビジュアルに表現しようとしている点でも貴重な史料である。実際、教科書の挿絵でも将軍宣下がおわったあと、大広間で諸大名の挨拶（礼）を受ける場面がよく使われる。ここでは、挿絵にどのようなものが描かれているのかに注目してみよう。まず、４代将軍家綱以降は、下向してきた勅使が江戸城で将軍宣下を伝えることで「将軍」になった（「将軍成」）が、この一連の様子が描かれている。京から下ってきた公家が登城する場面から始まり、儀式

に参加する諸侯が登城するところ、公家が玄関へついたところまでがひとくくり。次に、将軍宣下の儀式の様子を描き、公家がもてなしを受ける屋敷に帰る場面のあと、大広間で将軍になったことが披露され、諸大名や御三家がそれを祝う場面、下向した公家をもてなすとともに江戸町人をも招待する「町入能」が開催されている場面までがひとくくりである。その次のまとまりは、紀州徳川家が城内紅葉山（東照宮）へ参詣する行列(PW25/26)、老中の行列が一橋門から入る場面、大手内二の門のところで登城してきた大名が下乗して供を残す場面、元旦に諸大名が江戸城へ出仕する場面(PW27)などである。これ以外には、武士たちが正装した供を連れて仰々しく年始廻りをする場面、将軍の娘の婚礼のときの行列、武家屋敷の前を通行する武家の葬送行列などが描かれている。行列以外には、武家の家のなかでの年中行事も含めた儀式の場面（このなかに葬送や葬儀の場面も描かれている）、格式に応じた長屋門や衣服の紹介がなされ、それがどこまで精緻なのかについてのさらなる吟味は必要だとしても、このように威儀を正した行列や儀式、服装などをできるだけていねいに描くことで、「徳川氏が支配し、盛んだったときの世の中」を示すという意図は明確である。

この本が出された 1890 年ごろには、江戸時代や旧幕府を回顧して懐かしむような人々の集まり（会）が発足し、『江戸会雑誌』（のち『江戸会誌』）や『風俗画報』などの、江戸や旧幕府関係の書籍や画集が発行される。その中で、江戸文化、とくに元禄文化の再評価も含めて、江戸時代を見直す動きが出てくる。本書の刊行もそうした流れの中に位置づけることができる。この本が行列の挿絵であふれていることは、作者の旧旗本市岡正一だけでなく、その読者たちも、威儀を正して整然と通る武士たちの行列によって江戸時代を回顧することができたのだということを物語っている。

（２）「江戸一目図屏風」（津山郷土博物館蔵）のなかの武士たちの行列　19 世紀の武士たち（１）

江戸の人々がしばしば遭遇したのは、まずもって、江戸城や内外の役所に通勤（登城）する幕府役人たちの行列だったはずで、次に参勤交代で江戸と領地の間、そして江戸城と自分の江戸にいる屋敷とを大名行列であった。この屏風は、19 世紀（1809 年）、津山藩のお抱え絵師鍬形蕙斎が、墨田川東岸上空から江戸を俯瞰的に描いたものである(PW28～３０)。遠くに富士山、その前に江戸城を描き、浅草寺・寛永寺などをはじめとする名所をていねいに描きこんだ「名所絵」で、同じく蕙斎が描き版行された「江戸名所の絵」とともによく知られたものである。しかし、そこに描かれているものは、実は名所だけではない。よく見ると、江戸城へ登城する、あるいは下城する武士たちの行列にあふれている。参勤交代そのものは、将軍家光のときに制度化されたもので、交代で江戸と領地との間を往復し、江戸に滞在しているときには、決まっ

た日に江戸城に上り、身分や格式によって決められた部屋に詰める（詰めるだけ）ことになっていた。実際には、江戸城内で特別にする仕事はないのだが、江戸城に定期的に集まっていることを庶民に見せることには意味があった。大勢の供を従えた大名行列は江戸城を目指したのであり、その目指す先にいるのが全国を支配する将軍という仕掛けであった。実際にはほとんどの大名は、幕府の政治には関わることができず、譜代大名と旗本による独占的な政治運営が原則だった。幕府を動かしているのは、所領は大きくない一部の譜代大名と旗本だったが、大名行列というと、所有する領地の大きな外様大名の、その領地の大きさに応じて規模が大きくなる参勤交代の行列の方が思い浮かべられるし、実際に江戸時代でもこうした大きな大名たちの派手な行列が人気を博した。この「江戸一目図屏風」でも、江戸のメーンストリートである東海道で、江戸へ向かってくる行列と江戸から自分の領地に戻る行列が今にもすれ違おうとしているところを描く（PW３１）。しかし、この屏風には、政治をするために登城する譜代大名や旗本たちの行列もちゃんと描かれているのである。こうした、行列の規模は小さいが、政治の実権を握っている譜代大名や旗本の行列も含め、この屏風では、武士たちの行列は、まるで江戸の「名所」に溶け込んでいるかのように描かれる。

（３）「江戸城登城風景図屏風」（歴博蔵）のなかの武士たち　19 世紀の武士たち（２）

次に、1847 年に描かれた「江戸城登城風景図屏風」から、実際に江戸城に登城する武士たちの様子をみておこう(PW３２～３４)。登城する大名たちが江戸城をめがけてぞくぞくと集まってきている。この行列は、「下馬」と書かれた札の前で馬から降り、「下乗」という札のまえで駕篭から降りることになっていた。こんなにたくさんのお供を連れてきても、実際に江戸城内に入るのは、主人とほんのわずかな家臣だけになった。

では、主人が江戸城にいる間、主人を待つお供は何をしていたのだろうか。腰掛けて弁当を食べているのは、服装からみてもほんとうの武士たちのようである。しかし、どうもお供の多くを占めている人々（中間とか小者とか呼ぶが、「武家奉公人」とまとめることができる）は、じっと待ってはいられないようで、博打をしたり、酒を飲んだり、居眠りをしたり（PW３５）、けんかを始めたりしている。実は、参勤交代の行列も、「行列をたてて」（行列を構成して）人に見せるように行進するときだけには、このような正式の武士身分とは言えない、任期付きで集められた武家奉公人たちが、道具（槍）を振ったり、投げあったり（投げて渡したり）するというパフォーマンスをするのである。

実際には、武士たちというよりも、こうした武家奉公人をも含めた行列であっても、その威儀を正した登城行列の様子が見られる江戸城前は、江戸の町人たちだけでなく、田舎

（在所）から所用で江戸に出てきた人々にとって、滅多に見ることのできない様々な大名行列が行き交うところを見物する「名所」となる。

こうした見物人（なぜか相撲取りもいるPW37）を目当てにしたさまざまな商売人も現れる。ここでは、庭がなく植木罰で植物を育てる江戸、古着が出回っている江戸を象徴するような植木売りと古着売りが描かれるほか、屋台の居酒屋も描かれる（PW36）。まるで、煮物をさかなにお酒を飲みながら、行列を見物しているかのようである。見物用のガイドブックとでも言えるような一枚物の「武鑑」も売られており（PW37）、こうした様子は、「江戸で一番の見物は、一下馬、二相撲、三演劇」（旧薩摩藩士薄井龍之助、1916年）などといわれるようになった。いくら威厳を取り繕おうとも、江戸城登城の光景は江戸の「名所」となっていたわけである。

２　武士たちの行列の持つ意味

（１）領主と領民との間の儀礼の場（PW38）

ここで留意しておくべきなのは、江戸では、言わば「名所」の風景の一部にとけ込まされ、見物の対象にもなった大名行列も、自分の藩内、とくに自身の城下町あるいは領内では、「見物」の対象というよりは「拝見」の対象だという側面も持ったということである。最大級の外様大名である加賀藩主（前田氏）が、宮腰という金沢の外港である町の中を通行するときには、宮腰の町人の当主だけが正装のうえ、箒を手に家の前に下座して出迎えることになっており、城下町の主と町人と間での一種の「お目見え」という関係を象徴するものであった。したがって、一定の作法が必要とされた。それは、将軍の行列も同様であった。たとえば、1649（慶安2）年４月、将軍の跡継ぎに決まっており、将軍の代わりに日光社参をした後の４代将軍家綱が通行するときも、道筋の町家の主人だけが、家の前で下座して見送った。このように、江戸では将軍と本町人自身（町屋敷を所有し、その職業＝売ったり作ったりしているものに応じた負担を果たす町人のこと）、藩では藩主と城下町の町人本人との間での、言わば都市共同体の首長と成員との間で、儀礼的な関係が演出されたのである。

（２）儀礼的ではあっても見せなければならない（＝見られなければならない）（PW39）

このうち最大の行列は将軍の上洛の行列だったが、1634（寛永11）年の家光の上洛（PW40）を最後に、幕末の家茂の上洛（1863〈文久3〉年）までおよそ230年間なかった。前者は絵に描かれてその写しもたくさん残っているように、徳川将軍の権威を言わば巻物で示すようなものであり、それゆえに（徳川の平和を象徴する記録として、ある種のタブーはあったかもしれ

ないが）ことあるごとに写されていったものと思われる。後者の幕末の行列は頼朝に見立てて作成され、こちらは錦絵として、それこそ盛んに販売された。幕府側にとっては将軍の権威を示すという意図があったにせよ、沿道の人々にとってはその美々しい行装を見物するという「見世物」的な気分があったからにほかならない。この上洛に次ぐ威儀を正した行列は、日光社参に赴く将軍の行列（PW41）、江戸郊外の小金原に鹿狩のために出かける将軍の行列だった。このうち近世最後の日光社参となった天保 12 年のときのものは、錦絵や瓦版のネタにしたりするということは（出版統制が行われた時期とも関わって）憚られたにせよ、沿道の人々は、人や荷物の輸送のために集められた大量の人足や馬をともなったこの大行列を「拝見」というかたちではあるが「見物」したのである。

嘉永 2（1849）年の小金原の鹿狩りに関しては（PW42）、その前に実施された寛政 7（1795）年のときから多くの画像つきの記録が残され、この嘉永 2 年のときには、それこそ寛政のときの様子が描かれた絵画や前評判をあてこんだ錦絵、予め宣伝する瓦版などが大量に作成された。直接に徳川将軍を描くことはできなかったので、錦絵は頼朝の「富士の巻狩り」に見立ててつくられたが、「小金原の鹿狩り」を描いたものとして売られたことは明らかだった。これとは別に刷られた多くの瓦版のなかには現地の見物案内用に売られたものも含まれていた。この鹿狩りに向かう行列はもとより、将軍以下、狩りに参加する旗本は、それぞれの存在が目立つような色とりどりの陣羽織を着用して参加したので、それを多くの人々に見せない理由はなかったのである。当日までに、多くの村から数万人の百姓が、動物を追い立てる勢子人足として徴集されたが、彼らはその様子を見物することにもなった。本来、小金原は、幕府直轄の「牧」として、軍用の馬が放牧される場所だったので、そこでは毎年一度、「馬追い」といって馬を捕らえ、その年に生まれた馬に烙印を押し、利用できる馬を確保するという行事が盛大に行われてきた。実は、この「馬追」も江戸では評判となった行事で、多くの見物人が集まり、それを目当てにチラシ（瓦版）が刷られたり、屋台・物売りも集まったりしたのである。江戸や江戸周辺の人々にとって、一生に一度見ることができるかどうかという将軍の「小金原の鹿狩り」は、こうした「小金原の馬追」を連想させることで、さらに多くの人々の関心を惹いたはずである。幕府の方でも、当然このことを意識し、当日の狩りの見物はもとより、後日、将軍が狩りの様子を検分するために架設した「御立場」を含めた狩りの場所の見物も許した。

こうして、本来「拝見」に限られていたはずの権威ある行列も（鹿狩りという行事そのものも）、遅くとも 19 世紀以降には、「見物」を前提とし、絵画で記録されたり（写されたり）、あるいは錦絵などの画題として取り入れられて販売されるようになっていたのである（PW43）。

そして、19 世紀後半には、将軍の上洛でさえ「見物」の対象になっていくのだが、最後に慶喜が軍艦で江戸へ逃げ帰るときには、当然のこととはいえ、さすがに「見物」はない。その代わりに、旗・幟を翻して威風堂々と江戸へやってきた官軍が、見物され絵に描かれることになる。その際、最後の慶喜の上洛のときをも含めて、一定の「見物の作法」が強制されていたことに注意しておく必要がある。この作法については、次に述べるが、「行列を迎えるときの馳走」（迎え方）の作法であり、実質的には見物という行為を伴うとは言え、しかるべきもてなし(「馳走」）を経験するかどうかは、その行列を見物した人々の記憶や意識に影響を与えることになったのである。

3　行列を迎える側の作法＝「馳走」の作法（PW44）

もっとも権威のある将軍の行列に対するフルコースの「馳走」について簡単に紹介することで、行列を迎える作法について示しておこう。表 1 は、将軍家茂の二度目の上洛（1864〈元治元〉年）に際して、大坂町奉行所から大坂三郷町中に出された触れ（馳走触れ）を中心に、将軍を迎える際、通行する町や宿所近辺の町に対してどのような「馳走」をすることが求められたのかをまとめたものである。このときは、軍艦で大坂に入り、淀川をのぼって京都に向かうというルートだったうえ、馳走を簡略にするように命じているために通常の将軍への馳走にはなっていないところがある。これを補うために、1850（嘉永 3）年に来坂した老中松平乗全という、江戸幕府において政治的な権力を持つ老中に対する馳走の内容を含めて検討し、近世においてもっとも重い（フルコースの）馳走をまとめたものが表 1 ということになる。

どんなことが求められるかというと、通行する道筋の町々での馳走内容がＡからＩで、宿所近辺の町々では、さらにＪ・Ｋが付け加わる。まず、表の前提になるのが、いつその行列がどこを通るということをあらかじめ告知する触が出されることである（PW45①②）。これを便宜上「道筋触」と呼ぶと、この道筋触れが出されることで、道筋の町々では、いつ、誰のために（どの程度の）「馳走」をしなければならないかということを知ることになる。そうすると、道筋の町々では、日程にあわせて、町並みを整える（PW45③）。現在の大都市の繁華街を歩くと、看板やネオンがたくさん出されているが、当時も江戸・京都・大坂や各地の城下町では、軒先の看板などがはみ出しているところや、あるいは家の軒や壁、屋根などが傷んで入る場合があったようである。そこで、道筋の町並みや家並みの整備をするわけである。こうして、通行の障害物や見苦しいものをなくし、道や橋の修繕をする。触れでは、橋も道も直さなくてよいとされていても、実際には必要に応じて修繕せざるをえない。そして、通行当日が近づいてくると、道筋の清掃も始まり、前日までにはＣの①のようにていねいな掃除が行われた上で、

盛砂(PW46)・蒔砂・飾り手桶・飾り帚がセットになって道筋を飾り立てる。盛砂というのは、家ごとに砂を門の前に円錐状に盛る(立てる)こと、蒔砂は砂をまいて、誰も通っていない言わば汚れのない道をつくることである。砂は基本的には清浄であることを象徴する、あるいは「清め」の効果を象徴するかのような「白い」砂であると思われる。砂を蒔いたあと、さらに水をまきながら箒でさらにていねいに掃き清める。そして、この掃き清めるという作業を確かにしてあるのだ、ということを象徴するように、わざわざ箒と手桶を残す。もちろん、放置ではなく家ごとにきれいに並べておく。したがって、将軍の行列が通行するときの様子を思い浮かべると、このようになる。通行する町筋(メインストリートである)では、看板や屋根・壁などの修繕が行われるとともに、目障りな物が除去(あるいは目隠し)され、道がきれいに整えられる(行列が歩く部分は少なくとも白砂が蒔かれている可能性が高く、「蒔砂」あるいは「敷砂」とも言う)。各町の境目では、Dのように、町からの「出迎え」が行われる(町役人が正装して下座する。実際には、案内をしないとしても下問があれば答えることができるようにしてあるはずである)。町の境目で出迎えをして町の案内をしていくと考えてもよいかもしれない。家々の前には(あるいは等間隔に)白砂で盛砂がつくられる(「盛砂をたてる」という)とともに手桶・箒が飾ってある。その家の亭主だけが正装をして家の前で下座し、「拝見」する(見物ではない)。戸が開け放たれた家のなかでは、それ以外の家族(父母や妻、こども も含まれる)が、無作法(無礼・不行儀)がないように(床の上で)行列が通行するのを待っている。もちろん、見下ろすことになる2階からの見物は禁止で、2階の戸は閉められ、そこには人はいないはずである。往来に関わることでいうと、往来の道筋を止めて警護し、夜になると道筋の町家一軒ごとに提灯・行灯を出す。その上で防火体制をとる。これも重要で、将軍の場合には宿舎の周辺は言うまでもなく、大坂だと大坂三郷全体での防火体制がとられ、各町には自身番が置かれる。これに大坂の番方の武士たちが「番」をすることなど武士のつとめも含め、全体として「御馳走」という。その意味では、現在わたしたちが使っている「馳走」はそのごく一部(「ご馳走」は酒食のもてなしということ)に限定して使われているのであり、将軍を迎えるときの「御馳走」は言わばフルコースと言うことができる。以下述べるように、朝鮮通信使や琉球国王の使節に対する「御馳走」は、このフルコースとまではいかないものの、それに準ずる扱いを受けるのである。

4　「異国」の行列図像をよむ(PW47)

　将軍のような権威ある行列でさえ「見世物」化が進むのだが、それ以前から江戸の人々が楽しみにしたのは(江戸以外の沿道の人々も)、「鳴り物」入り(ほんとうに楽隊が演奏する)で

行進する朝鮮・琉球の使節の行列であった。ともに、あらかじめ刷り物や案内書などに刷られて紹介され（PW48）、こうしたパンフレットを手に見物を楽しんだのである。これは、まさに「見物」すること（「見物」させること）に政治的な意味があったからではあるが、これとても、一定の見物の作法が強制されていたことに留意しておかなければならない。本論との関係で言うと、二つの外交使節は、それが向かう先の幕府将軍の権威だけでなく、実際に使節の人数を上回る人員で江戸まで警固して行進する対馬藩（朝鮮通信使）と薩摩藩（琉球国王の使節）の権威を示す役割もあったからである。

（１）描かれた「朝鮮通信使」（PW49）

まず、朝鮮通信使の行列は、「洛中洛外図屏風」「江戸図屏風」など都市図のなかで、それぞれ重要な政治的できごととして描かれているが、たとえば「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）では、「韃靼人」のような武官が描かれるなど、粉本を参考に描かれた可能性が高い。その意味では、ロナルド・トビ氏が指摘するように「朝鮮通信使歓待図屏風」（御寺泉涌寺蔵PW50/51）が、絵師が実際に見物して描いたものとしてはもっとも古いのではないかと思われる。4代将軍家綱が、叔母の和子（建礼門院）のために、絵師狩野益信に命じて1655（明暦元）年の朝鮮通信使を描かせたもので、全体として豪華なものになっているだけでなく、個々の人物の表現も豊かである。行列の構成などがスペースの関係で省略されていたり、先頭にあるはずの「清道」旗が、「徹喜」（トビ氏は喜びが徹るという解釈をしており、異国の王が道筋を清掃するように命じる清道旗が先頭に来ることへの批判を）回避しようとしたと解釈する）になっていたりするなど、絵師の判断で実際の行列とは異なるものになっているところもあるが、この時点での様子を知る上では基本的な屏風である。

とりわけ、先にのべた「馳走」の観点からは、実に興味深い描き方をしている。第一に、道筋を清めたことを象徴するかのように箒を持った男と柄杓で水を撒いている男が描かれることである（PW52~54）。通行しているさなかに清掃をすることはありえないが、わざわざこのような姿を描くということはこの行列に対して「馳走」がなされていることを示す。第二に、行列の通行を妨げるような行為を制止するための棒を手にした者たちが、路地では往来止めをしており、路地で見物している人々は行儀良く下座して見物している（PW55）。第三に、沿道の町屋のなかから人々が見物している様子が描かれているが、開け放した部屋には毛氈をかけ、屏風をたてていることがわかる（PW56）。一方的に通信使の行列を見物するのではなく、通信使からも見物させていると考えられる。ここでは、「見物」は双方向で、いわば互酬の関係なのである。ここでは、「馳走」をし、「作法」にしたがって行列を見物する沿道の人びとの視

線と、対馬藩の大勢の武士たちによって警固されながらも、「官服」（役人の正装）を身にまとい（PW57）、朝鮮国王の権威を示すさまざまな旗や楽隊に先導された「国書」（朝鮮国王から将軍にあてた書簡、これが行列の中心である）を無事に将軍に届けるべく威厳をもって進む（PW55）朝鮮通信使一行が町や町人の様子を見物する視線とが交錯するのである。

こうして、朝鮮通信使の行列を迎えるときには、たしかにわかるかたちで「馳走」が行われ、見物にも「作法」が求められたのだが、この行列を無事に往復させることは、対馬藩にとっては最重要課題だった。沿道の多くの人々に「見物」してもらい、外交を任された藩の権威を見せることが必要だったので、多くの「行列絵巻」（江戸上り・登城・下城・江戸下り・日光参詣＋船行列）を藩が作成させている。現在も多くの絵巻が残るが、幕府の命を受けて作成したものも含め、贈答のために制作され、さらに写本がつくられた可能性が高い。同時に、対馬藩では、「行列付」などの刷り物や「来朝記」など、手にとって行列を見物するためのガイドブックを出版・販売する許可を書肆に与えたので、こうしたものが使節通行の日時が決まると作成され、一般に売られた。また、「朝鮮人来朝図」（「朝鮮人浮絵」）（羽川藤永）「賄い唐人」（英一蝶）、「少童」など（PW58）、通信使の行列やその一行のなかの人物を題材として描かれた絵画資料も作成されて人々の人気を博した。

異国の行列が、音楽を奏でながら行進するさまは、基本的には数十年に一度しか見聞する機会がなかったので、あらかじめ刷り物やガイドブックが売られただけでなく、例えば江戸の近郊からも多くの見物人が訪れた。こうして、実際に行列を見物した人々、あるいは印刷されたものを見た人々が、自らの町の祭礼にその行列を取り入れようとすることになり、たとえば江戸周辺の川越や土浦などの城下町祭礼の仮装行列のテーマとして「唐人行列」が採用されるようになるのである。基本的には、物珍しい異国人の行列の模倣ではあるが、トビ氏がすでに指摘しているように、実際の通信使一行にはいない「賄い唐人」なる存在を「創造」するほか、少なくとも肉食をすることを強調するような表象も見られるようになる。ただし、自らが演ずる仮装行列は、差別意識というよりも珍しい異人を表象するという性格のものであったのではないかと考えている。この点の論証は今後の課題だが、朝鮮通信使の行列が実際に江戸まで往復している時期あるいはそのときにある作法を持って見物した人々が生きている間は、後述するように 19 世紀半ば以降急速に広がるように思われる差別意識は少なくとも庶民の間にはまだ生まれていないのではないかと想定している。

（２）描かれた「琉球使節」

琉球国王の使節については、本日のほかの報告でも触れられるので、ポイントだけ指摘して

おこう。琉球からは将軍の代替わりには慶賀使が、国王の交替時には謝恩使が派遣された。この琉球は、1609（慶長14）年に薩摩の島津氏が征服したのちは、実質的には薩摩藩の支配下に入るが、一方でそれまでの中国との外交・貿易関係（冊封・朝貢貿易関係）は継続した。とくに、中国の皇帝から琉球国王に冊封使を派遣し、国王に命ずるという儀式が王位の継承や朝貢貿易の維持には不可欠で、薩摩藩もそれを認めたので、近世において琉球は言わば「両属」の国として存続したのである。もちろん、琉球王府内での種々の改革も行われ、独自の政治文化を維持することが日本・清両国の間で自己主張するために必要であり、そこには琉球王国政府の「戦略」もあった。

琉球国王の使節は、実質的に支配している薩摩藩の藩主が連れて江戸へ来る。行列の構成を見ると、琉球の使節の人数よりも薩摩藩士の人数の方が圧倒的に多い。実は薩摩藩の行列だと言ってもよいような行列の中に、琉球の使節が組み込まれていると言える。しかし、琉球国王の使節がなければ薩摩藩はそのようなことは出来ないので、まさに薩摩藩が演出しながら琉球を連れてくるわけである。この琉球使節の行列については、名古屋城下を通行するときの様子を小田切春江が描いた『琉球画誌』に詳しい。まず、琉球使節が来る前に行列附けが売られている。8文といっているので、いわゆるかけそば一杯の半分という安い値段で琉球使節の行列を紹介する刷り物を買うことができるわけである（PW59）。次に、琉球人の格好をしてお金をもらう二人連れが町に出てくる。本当の太鼓ではなくて金盥を叩いていると書いてある（PW60）。そして、大野屋惣兵衛の店先でガイドブックが売られている様子も描かれる（PW61）。前日、前々日になると、道を直すことが始まり、屋根を直して道筋を整えることで、「馳走」の体制が本格化する。こうして道筋を整えたところに、棒と竹でここから出てはいけないという線を作ってそのうしろに桟敷をつくらせている。桟敷の値段は36文と書いてあるので、かけそば2杯ぐらい（あるいは今風に言うと、スターバックスのコーヒー2杯）の値段ということになる（PW62）。この桟敷の人たちは小さくて詳細はよくわからないが、それぞれみな正装か、良い格好をして、正座して見物しているように見える。その中を琉球使節が通っていく（PW63～65）。箒と手桶が家々の前に置いてある。通りに面した町屋には幔幕が張ってあり、店の中から見物する一方、店の中まで見せているという関係がここでも明らかである。ここには、盛砂は見られないが、現在の広島県の鞆の浦での琉球使節への「馳走」の様子を少しだけ検討しておこう。客殿からの眺望が見事であることで知られた福禅寺などに宿泊していたが、港からそこまでの道筋はていねいに掃除されていた。宿舎の門前には砂が円錐に盛られ（盛砂）、水桶が出されて、座敷は飾ってあった。きわめてていねいな「馳走」がなされていたことがわか

る。

（３）描かれたオランダの出島商館長の一行

朝鮮通信使と琉球国王の使節は、それぞれ対馬藩と薩摩藩の利害に基づいて、見物が行われなければならなかった。同時に、とくに幕府が招聘した朝鮮通信使の場合は、国賓としてもてなす必要があったので、最上級の「もてなし」（馳走）が行われた。

これに対し、オランダ商館長の行列はどうか。朝鮮や琉球の使節に要する費用は、幕府や「馳走」を命じられた藩の負担で、運送・宿泊・食事（自炊の場合、食材・燃料は支給し、食器や道具は貸与する）はそれで賄われたので、膨大な経費がかかり、財政難の幕府や藩にとっては大きな負担となった。これに対して、オランダは、貿易が認められているだけの関係で、江戸参府するこの一行もオランダ側から貿易許可に対するお礼を将軍に述べるために派遣されたので、経費はすべてオランダ商館負担となった。当初は毎年、のちに貿易額の減少によって４年に一度になったものの、実は日本のなかをもっとも定期的に往来していたのは、この行列ということになる。しかし、幕府による国賓待遇もないまま、九州や貿易に関する藩領では、道路の清掃や役人の派遣＝あいさつなどのもてなし（「馳走」）があったものの、大坂の重要な見学場所である銅の精錬所で一行を迎える盛砂がつくられたほかは、朝鮮通信使や琉球国王の使節のように目立った「馳走」はなされていない。したがって、沿道の人々の関心もそれほどではなく、またオランダ商館長一行も物珍しげに見られることを嫌ったのか、オランダ商館長一行の江戸参府を描いたものは、オランダ人自身の注文品以外には見当たらない。

おわりに

最後に６点にまとめておこう。第１に、朝鮮通信使と琉球国王の使節に対する沿道の「馳走」は基本的には同じレベルだったということである。国家的使節に対する作法が強制されていて、幕府はそれを正徳のときを除けば基本的には変えようとしなかった。慶長期から「馳走」をすることが命じられており、表１に示したような道筋の馳走のメニューが確定するのは寛文期だと思われる。17 世紀の半ばぐらいから確定し、それが最後まで基本的には守られたことになる。

そして、第２に、画像資料でみたように、とくに行列絵巻は、朝鮮通信使と琉球使節は基本的に同じように描かれるのである。もちろん服装や行列の構成に違いはあるが、構図はほとんど同じであり、宝暦の時のように、相前後してやってきたとき、先に来た琉球使節の行列図を模倣して、そのまま朝鮮通信使の供連れはそれで描くというようなことも行われた。それほど同じようなものだと、少なくとも絵の読者には考えられていたということになる。

にもかかわらず、第３に、ともに国王の使節だと喧伝されてはいるが、実際の関係（処遇）は異なったということである。朝鮮国王とは、少なくとも形式的には対等な関係を維持しているのに対し、琉球の国王の場合は、薩摩藩が実質的に支配しているので、ほとんど属国になってしまっていると言える。また、対馬藩と薩摩藩は、幕府に対し、「家役」として外交交渉を請負い、その反対給付として貿易で利益を得ることを認められたという点では同じだが、そもそも朝鮮との貿易なしでは藩および藩民の生活が成り立たない対馬藩と、琉球が中国に臣従すること（冊封関係）を認め、朝貢貿易で得たものの売買で利益をあげる薩摩藩とでは、それぞれ朝鮮や琉球に対する対応や思惑が異なる。この点では、幕府もそのことを踏まえており、全国的な馳走体制は朝鮮通信使に厚い。

第４に、もう一度繰り返すようだが、このように実際の処遇は微妙に異なるにもかかわらず、第１点目で指摘したように、国内を通行させるときには、同じ異国の国王の使節であるという扱いをして見せるのである。両方とも将軍の権威を高めるものであって、同じような演出が施される。朝鮮から来る時も琉球から来るときも、下関から瀬戸内海を船で来て、そして淀川をさかのぼり、淀から歩いて京都へ入る。その道筋で宿泊するところの大名は、料理を用意して待っている。先に述べた、「御馳走」という、まさに行列を迎え、送り出す準備をするわけである。幕府の命によってではあるが、各大名は競い合うようにして、「御馳走」を行うことになるのである。

そこで、第５に注目しておきたいのは、こうした行列を見物する人々にとっては、両方の違いをどこまで認識したかは別にして、少なくとも「馳走」の作法を強要されたことである。こうした、実際の経験を持ったことの意味は大きく、少なくとも行列を実際に拝見した人々のなかからは近代以降のような両国への差別意識は直接には生まれてこないものと思われる。さらに言えば、『琉球使節道中絵巻』のなかには、老女が琉球国王の使節を拝んでいる場面が描かれており（PW66）、異国の王の派遣した使節が、音楽を演奏しながら通行する様子は、拝む（拝見する）対象にもなった可能性がある。少なくとも、このような作法で行列を実際に見物した人々は、このような行列の通行を目にすることがなくなった人々とは異なるのではないか。

第６に、祭礼との関わりで言うと、両方の行列ともに、仮装行列として祭礼出し物の題材になっていくということの持つ意味である。朝鮮の通信使も琉球の使節の行列も、実際に見た人々、あるいは見ていなくても、それをパンフレットやガイドブックで見た人々が、自分たちの町の祭礼行列の中に、あるいは見世物の中に、仮装行列あるいは人形の作り物という形で包摂していくことになるのである。『名陽見聞図絵』では、琉球使節の名古屋通行後、人を寒天、富士

山などの山を青海海苔や浅草海苔でつくった使節一行のミニチュアの見世物が出されたことを紹介するが、同時に朝鮮通信使の誤りではないかと注記しており、実際には混同されるようなものでもあったのである（PW67）。祭礼行列も、本質的には神様の渡御のお供をするわけで、観る側にもある程度の作法が必要になるが、ひとたび祭礼の出し物のなかにこの「異国の行列」が取り込まれると、本来の行列には存在しないものが発明されるようにもなる。トビ氏によれば、「賄い唐人」（PW68/69）という、本来の行列にはいないような存在が、祭礼の担い手たちの想像力によって生み出されるのである。この祭礼行列への取り込みが、実際の両国の使節を実際に見物することができなくなるなかで、さらに変質し、差別的なまなざしへと変化する点にも留意しておく必要があるが、ここでは指摘するに留めたい。

※【追記】

シンポジウムのときには、用意していた画像（拡大縮小が自在にできるタッチパネル用のプログラム）を、会場のプロジェクターの容量の問題で使うことができなかったため、急遽パワーポイントに変更して報告したため、原稿を大幅にカットして読み上げた。そのため、マーク・マクナリー先生が討論のために周到に準備していた論点も含めて十分に話すことができなかった。ここでは、その部分も含めて掲載している。

また、討論のときに問題となった、「内と外」あるいは「中心と周縁」とも言えるかもしれないが、このような対比のなかで、描かれた琉球の行列の位相についても発言すべきだった。さらに行列を描くこと、描かれることの持つ意味についても補足的に述べるべきであったが、発言する機会を逸したので、ここで少しだけ述べることをお許しいただきたい。

すなわち、一つは描かれた琉球使節をこの場（日本でも琉球でもない、このハワイというところで）で論ずることの意味についてである。ここで紹介された琉球使節の行列図は、いずれも薩摩藩の注文あるいは許可のもと、日本で（「日本人」の絵師によって）描かれたものである。琉球の人々は、中国からの影響を受けてあるいは日本よりも書画の技術にたけており、自らの「自画像」を描いている。さらに、清からの冊封使の一行を描いていると思われるほか、北京に向かう自分たち琉球国王の使節の一行を描いている。しかし、日本における行列は、一方的に描かれるにとどまり、彼ら自身は自らの行列を描かなかったのである。この点では、まず朝鮮通信使との違いについて検討する必要がある。朝鮮通信使の行列も日本人の絵師によって「一方的に」描かれたが、彼ら自身も絵師を同行させており、おもに風景ではあったが、描かせている（描き返している）。また、通信使の行列についても自ら描いたものがいくつか韓国に残っている。この点は、「儀軌」に儀式の様子やさまざまな行列が描かれていたことを考

慮すれば、当然のことであったといえよう。幕府による琉球使節と朝鮮通信使の扱い方に違いがあることについては、本文中でも触れたが、この点の違いは大きい。

一方、近代になって同じように（琉球の人たちは一緒にされることを忌避するが）近代国民国家のなかに組み込まれるアイヌと琉球との違いについては、アイヌの人々も琉球の人々も言葉によって自らの歴史や物語を豊かに表現してきた。しかし、上述したように、琉球の人々が自らを描き、書きあらわしたのに対し、アイヌの人々は、少なくとも近世においては自らを描くことも文字で表現することもなかったと言えよう。わたしたちの博物館では、常設展示のなかで「アイヌ絵」という表現でこのアイヌの表象について紹介しているが、そこに描かれたのはまずもって「和人の見たいアイヌの姿」（外なるアイヌの姿）であって、実態をどこまで描いているのかについての吟味が必要であると主張している。このような、アイヌと琉球との比較、あるいは朝鮮通信使と琉球使節、あるいはオランダ使節との違いをどのように考えるかについてはもう少し丁寧な議論が必要だと考えるが、こうした「違い」も含めて、描かれた行列についての分析を行う必要があるはずである。そのなかでこそ、描かれた琉球使節の行列の位相についても理解することができるのではないか。したがって、とくに「内なる日本人」によって一方的に描かれた、「外」である琉球の画像をそのまま分析することには注意しなければならないと考える。少なくとも、いかなる視線で描かれたものなのかの吟味が不可欠で、中央と終焉という対比も含めて、その視線の違いから、このような画像資料の史料的価値が初めて評価できるように思われる。

表：道筋・宿所近辺町々での「馳走」一覧	
「馳走」の分類	内容
道筋町々での「馳走」	
A 道筋の町並み （家並みの整備）	①道筋の町家の修繕など ②通行の妨害物の除去（囲置）
B 道・橋の整備	①道直し ②水道さらい（雨水のとき，雨水が道に流出せぬよう）・溝さらい ③橋の修繕
C 道路の掃除 （＝キヨメ）	①道筋の掃除（川筋では，川筋・濱の掃除） ②盛砂 ③蒔砂 ④飾り手桶 ⑤飾り箒 ⑥不浄物・目障りなものの除去（囲置）
D 各町での出迎え	①「町々境目」へ，年寄は麻上下・帯刀，「月行事・町人其外罷出候者」は羽織袴・無刀 ②町境の札に町名を明示すること
E 道筋での「拝見」 （＝見物）の作法	①不作法・不礼・不行儀の禁止→前提！ ②二階からの「見物」の禁止＝見おろすことの禁止 （＝道筋の二階窓の戸，出格子類を閉めておくこと，二階へ人を上げぬこと） ③道筋に面した町家での「拝見」の作法 男は土間に平伏，女子供は「床上」（「其儘差置」）→「見世先・格子窓」からの「見物」の禁止 ④見通しになる横小路・横町での「拝見」の作法 （通行時には，横小路へ片寄り，下座すること，辻々に出て見物することの禁止など）
F 道筋の往来に係わること	①道筋の辻固め ②通行時の往来留め（川筋での船留，橋の往来留） ③道筋の牛馬・車の往来留め ④道筋の路地を通行時に閉めておくこと
G 道筋の夜の作法	道筋の町々は、提燈（ちょうちん）（挑燈，但行燈（あんどん）の場合もある）を出すこと →家ごとの場合と町々で「間配（まくばり）」して出す場合 →前夜・当日の両方ともに出す場合とどちらかだけの場合
H 防火体制をとる	①火の用心の徹底 ②火消人足の動員体制をとる
I その他	町人の諸商売・職人の作業についての規制
宿所近辺の町々での「馳走」	
J 防火体制をとる	①滞在中の火の用心の徹底 ②自身番 ③薪を高く積むことの禁止
K 宿所近辺の往来の規制	牛馬・車

表 1